

曼珠沙華

と短歌

おちあい
落合けい子

先日、買い物帰りに通った畦に彼岸花が一つ咲いていた。茎はとても細く、丈は二十センチほど、花も子供の手ほどの小ささで、蕊も糸みたいで色も浅かったけれど、しっかりと立って咲いていた。十一月も近づいたころに咲く彼岸花を見たのはじめてだった。

彼岸に咲くから、彼岸花とはよく言ったものよね、の挨拶が今年はなかなか咲かないね、に変わった年だった。それほど二〇一二年は酷暑で、期間も長かった。それでも彼岸の終わり時分には咲き初め、当地では十月半ばまで咲き続けた。

彼岸花は幽霊花や火事花、捨子花など負のイメージで呼ば

れ、嫌われることが多いけれども、私は子供のころからこの花が好きだった。

半世紀以上も昔、母と母の姉(だったと思う)と三人、どこか広い畑のような所を歩いていた。母と伯母は立ったまま話して、私は初めて見る赤い花に誘われ、花摘みに没頭していた。どの位経った頃だろう、後方で聞きなれない母の甲高い声がする。どうも、摘んだ花を捨てなさいと言っているようだ。どうして、こんなに綺麗な花なのに、と思いつつながら、私は黙って突っ立っていた。すると、母はいよいよ捨てなさいと怒ったように言う。私は訳が分からず暫くぼかんとしていたのだと思う。やがて母の顔が泣くように崩れていくのを見て、なんだか母に悪いことをしている気がしてきて、意味が分からないままに花を捨て、母の傍に戻った。戻ると母は、「あの花には毒があるのよ」と眉を顰めた。

記憶はこの場面だけ鮮やかに残っていて、前後は欠落している。それ以来、私はあの赤い花が忘れられなくなった。

鱗茎にアルカロイド系の毒があるため毒花、痺れ花とも呼ばれているが、飢饉の折には水にさらして毒抜きをして飢えを凌いだとも、また田を荒らす動物が鱗茎の毒を嫌うから畦に、土葬の遺体を守るため墓に人為的に植えられたともいわれている。現在はアルツハイマーの薬にもなっているのだから、有難い花なのに、嫌われては可哀そうである。

もちろん当時はアルツハイマーの言葉すら知る由もなく、母は私が病気にでもならないかと心配してくれたのだと思う。その親心が切なくもある母との思い出の花でもある。

曼珠沙華ゆけどもゆけども畦赫しさびしくないぞさびしくないぞ

有史前に渡来せしとふ曼珠沙華園のうつつに燐を巻き締む
曼珠沙華憤怒してゐる美しく大和国原滅びの最中

曼珠沙華のくれなる騒ぐ畝をゆくをんな細りて曲がりて消ゆる

彼岸花には千余りの異称があるらしいが、こんな花も珍しいのではないかしらん。地方では、はっかけばあなどというユニークな呼称もあり、また剃刀花や数珠花、墓花、死人花などのイメージに反して、花の姿から天蓋花や、仏典に由来した天に咲く花という意味のある曼珠沙華とも呼ばれている。

私はこの曼珠沙華という響きが好きである。近代より曼珠沙華の名で詠われた歌は、彼岸花より多いのではないかと思われる。

曼珠沙華ここにも咲きてきぞの夜のひと夜の相おもほゆる
かも
斎藤茂吉『赤光』

冬岡に青々として幾むらの曼珠沙華見ゆわれひとり来む

『寒雲』

曼珠沙華のするどき象夢にみしうちくだかれて秋ゆきぬべ
き
坪野哲久『桜』

秋の色ここにきはまり曼珠沙華わが身力も昏くそめたる

馬場あき子『ふぶき浜』

もう充分にあなたのことを思つたから今日の私は曼珠沙華

宮 英子『海嶺』

風を浴びきりきり舞いの曼珠沙華 抱きたさは時に逢いた
さを越ゆ
吉川宏志『青蟬』

まんじゅしゃげの言葉の調べなのか、神秘的な漢字の印象なのか、曼珠沙華の歌はどこか甘やかな相聞の匂いがある。

茂吉の『寒雲』の歌は異色で、花ではなくて、葉の頃の曼珠沙華を詠っている。

曼珠沙華は花が終わると細い葉のみが出て、春には枯れて秋まで地上には何も無い。そして秋には茎だけが伸びてきてまた花を咲かす。姿も形も生育も不思議な花である。花と葉は会うことなく、花は葉を思い、葉は花を思うというロマンチックな意の相思華とも呼ばれたりする。

歌を始めたころ、曼珠沙華を詠いたくて苔を二本、開花したのを三本瓶にさして朝晩眺めていた事があった。ある日水を替えようとして驚いたことに、茎の切り口が四つから五つに割れていて、その一つ一つがさらに二つに割れて反り返っていたのだ。まるで花が上にも下にも咲いているようで、それは不思議な姿だった。二本の切り口は真っ直ぐだったから、苔で摘めば茎は割れないのだろうか。来年試してみようと思いつつ、もう何十年過ぎただろうか…。

曼珠沙華弾けて赤し藪かげに少女のわれとすれ違ふかな

次号は杉本容子さんをお願いします。